

鳥羽離宮跡

文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要

1979年度

京都市文化観光局
財団法人京都市埋蔵文化財研究所

例 言

1. 本書は、昭和54年度に鳥羽離宮跡内で実施した発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査は、京都市文化観光局文化財保護課が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し同研究所がこれを実施した。
3. 発掘調査は第1表のように実施した。本年度の調査は東殿に集中した。

次数	所 在 地	備 考
49	伏見区竹田浄菩提院町45-2	東殿 X X IX
50	" " 内畑町120-10	" X X X
52	" " 桶ノ井45	" X X X II
53	" " 内畑町119-3・119-5	" X X X III
56	" " 内畑町9-B・26	" X X X VI

第1表 昭和54年度発掘調査一覧表

(抜けている数字は、国庫補助以外の調査)

目 次

	頁
第49次発掘調査	2
I. 調査の経過	2
II. 遺 構	2
III. 遺 物	2
IV. まとめ	4
第50次発掘調査	5
I. 調査の経過	5
II. 遺 構	5
III. 遺 物	5
IV. まとめ	9
第52次発掘調査	10
I. 調査の経過	10
II. 遺 構	10

III. 遺物	10
IV. まとめ	10
第53次発掘調査	12
I. 調査の経過	12
II. 遺構	12
III. 遺物	14
IV. まとめ	18
第56次発掘調査	19
I. 調査の経過	19
II. 遺構	19
III. 遺物	21
IV. まとめ	21

挿 図 目 次

図 1 調査位置図	1
図 2 第49次調査図	3
図 3 溝 (SD-01) 断面図	3
図 4 第50次調査図	6
図 5 遍照院跡調査図	7
図 6 第52次調査図	11
図 7 明照院古図	12
図 8 第53次調査位置図	13
図 9 第53次調査図 I (明照院跡)	15
図 10 第53次調査図 II (平末～鎌倉時代)	17
図 11 第53次調査東西断面図	18
図 12 第56次調査位置図	19
図 13 第56次調査図	20

図版目次

図版	一	鳥羽離宮遠景
"	二	1 第49次調査西半
"		2 第49次調査東半
"	三	1 第50次調査地（江戸時代）
"	- 2	"（礎石）
"	- 3	"（中世）
"	四	第52次調査地全景
"	五	1 第53次調査地 明照院跡（第1トレンチ）
"	- 2	" "（第2トレンチ）
"	六	1 " 明照院跡
"	- 2	" 瓦敷細部
"	七	1 "
"	七	2 "
"	- 3	"
"	八	1 "
"	- 2	"
"	九	1 " 最終遺構面
"	- 2	" 断面
"	十	1 " 第3トレンチ最終遺構面
"	- 2	" 第3トレンチ西壁断面
"	十一	1 " 出土遺物 鳥形木製品
"	- 2	" " 墨書板
"	- 3	" " 舟形木製品
"	十二	1 " " 鬼瓦（江戸時代）
"	- 2	" " "（平安時代末）
"	- 3	" " "（ " ）
"	十三	1 第56次調査地全景

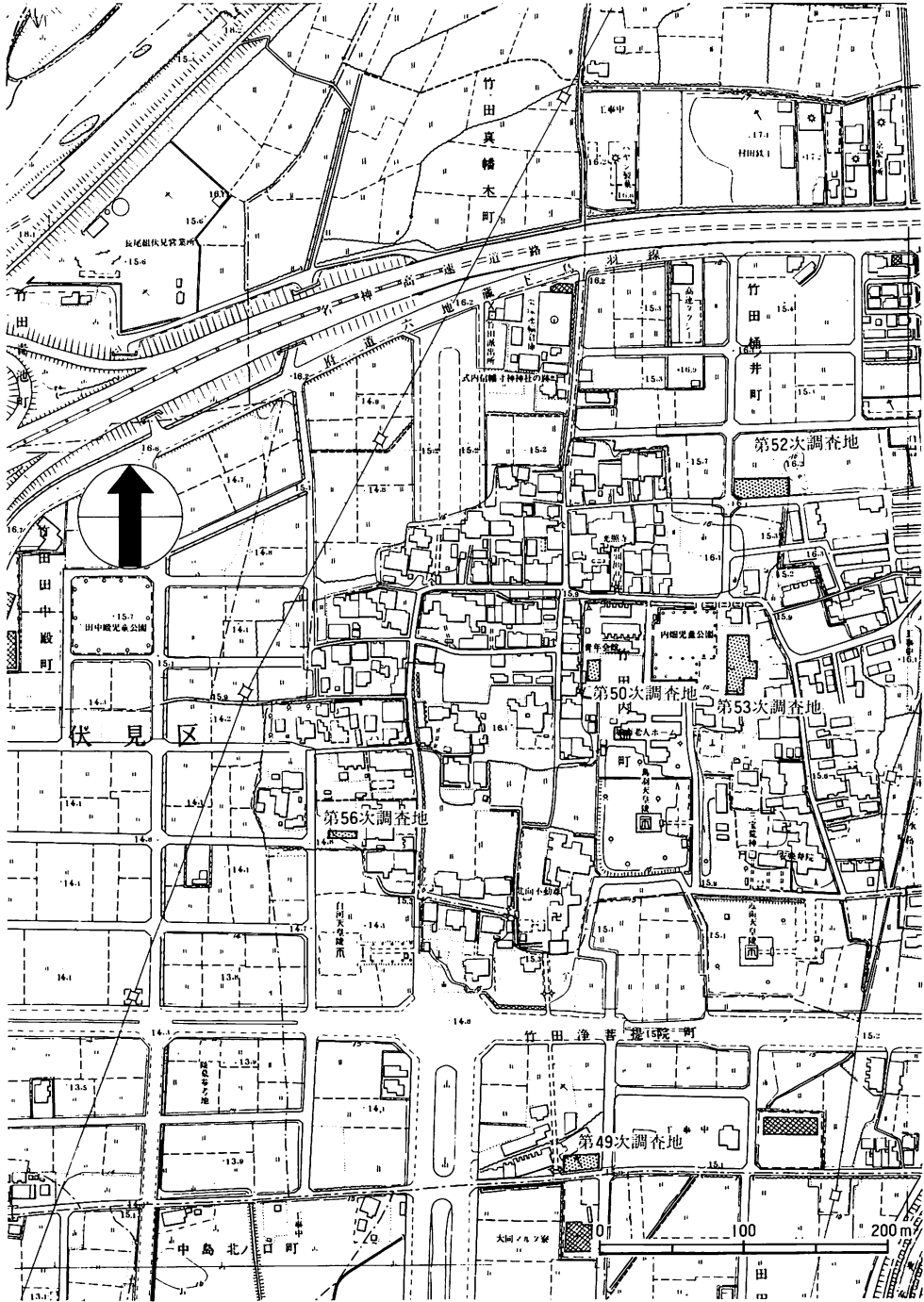


図1 調査位置図

第49次（東殿 XXIX）発掘調査

I. 調査の経過

今回の調査は、民家の新築工事に先だって実施した事前発掘調査である。調査地は、舟入り遺構の南東隅に隣接し、また第42次調査地のすぐ南側に位置する。当地付近は、先年の調査で庭園遺構がきわめて良好な状況で遺存している事が確認されている。当調査地もこれら一連の遺構が検出される可能性が充分考えられた。

II. 遺 構

調査の結果、鳥羽離宮期の溝・井戸状遺構等が検出された。当地は、先年山土によって水田を盛土して宅地化した埋立地である。層位は、盛土下に旧水田耕作土、床土が認められた。その下層には、茶褐色または茶灰色を示す有機物を若干含む泥土層が検出された。更にその下地山と考えられる青灰色砂礫層が認められた。溝は、北東から南西方向に伸びる幅4 m、深さ1.5 mを計る。溝は素掘りでなんらの護岸施設も認められなかった。埋土は、茶褐色及び黒褐色を呈する有機物層である。同層からは、土器・瓦・木製品等の遺物が多量に出土した。井戸状遺構は、先述した溝の南側より検出された。検出された部分の構造は、小形の曲物一段だけで他になんらの施設も認められなかった。この遺構は、上部が削平されてこのような状況になったのか、当初からこの様に簡単なものであったのかについては、今回の調査で明らかにする事ができなかった。曲物内からは全く遺物は出土していない。また、この井戸状遺構周辺より幅30cm、深さ15cm前後の溝が検出された。

III. 遺 物

出土遺物の大半は溝内より出土した。それらは、土器・瓦・木製品・獣骨・植物遺体などである。土器は、土師器・瓦器・山茶坑・輸入陶磁器等に分けられる。中でも瓦器・山茶坑・輸入陶磁器は遺存状態も良好でその出土状況から見て一括遺物と考えられる。ここでは瓦器・輸入陶磁器・木製品について述べる。瓦器は坑がほとんどで、皿が少量認められた。坑は成形手法、特に口縁部のナデ・体部内外面に認められるヘラミガキ等の違いによって2種類に大別される。前者は、口縁部強くナデ、体部との境に軽い稜がつく。体部内外面及び底部内面に幅3～4 mm前後のあいへらミガキを施す。体部内面のヘラミガキは、間隔が広く弧を描く様に施す。後者は、口縁部のナデは軽くやや内湾ぎみに仕上げる。ヘラミガキの幅は2 mm前後で体部内面はヨコ方向に丁寧に施す。共通点は、幅広の断面台形の低い高台をもち、焼成良好である。輸入陶磁器は田中殿2次調査の際出土した四耳壺と同

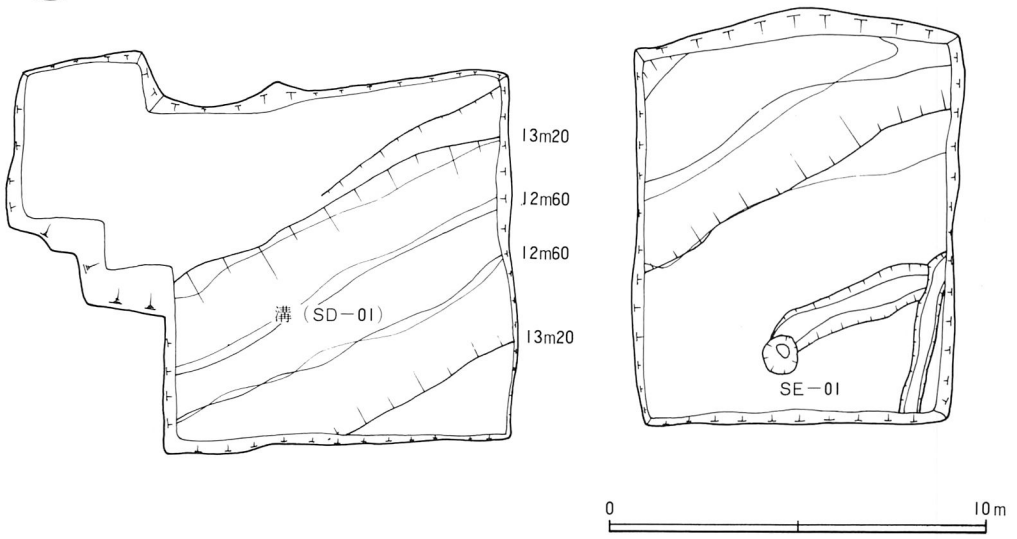


図2 第49次調査図

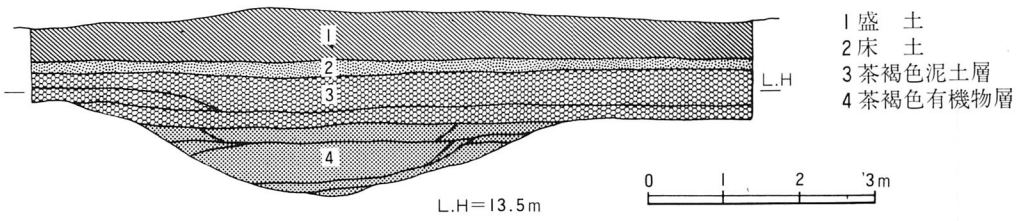


図3 溝 (SD-01) 断面図

タイプのもので口縁部・体部・底部等の破片がある。口縁端部は丸く仕上げ頸部と体部との間は稜をなす。底部は削り、底部外面は凹形を示す。体部から底部にかけて褐色の釉を施す。この形式のものは鳥羽離宮内ではまれで今回調査で2例目である。木製品は種類が豊富で、曲物・箸等の日常生活品や独楽・墨書板等の特殊なものまである。中でも独楽は今回の例がはじめてである。独楽は外面を刃子状の工具で丁寧に削り仕上げている。軸は鉄を用いている。特に彩色等は認められなかった。墨書板については現存解読中でくわしくは本報告にゆずる。

IV. まとめ

今回検出した溝は、第11・32次調査で確認されたものと一連の遺構と考えられる。この溝は、東殿に造営された庭園遺構をとり囲む様に設けられている。近年、今回の調査を含めて東殿南の庭園遺構やその周囲の状況が1歩1歩明らかにされつつある。また、第9次調査地で発見された舟入り遺構との関連や旧地形復原においても注目されよう。

第50次（東殿 XXX）発掘調査

I. 調査の経過

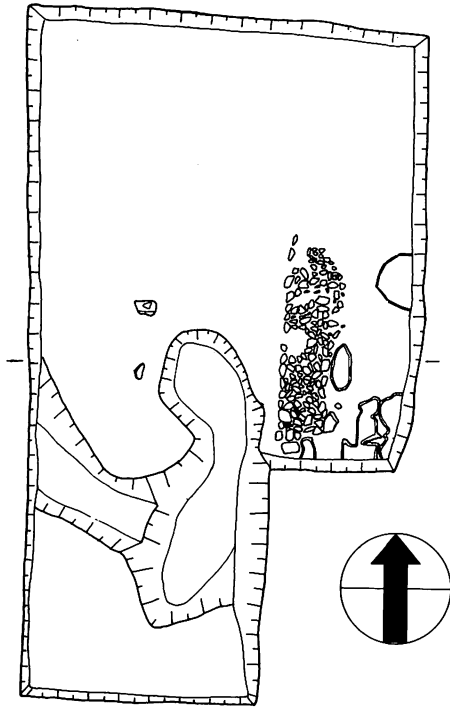
今回の調査は、民家の新改築に先だって実施したものである。調査地の周辺は第22・33・26・47次調査によって江戸時代の安楽寿院12ヶ院関係の礎石建物(遍照院)・溝・暗渠が検出されている。

II. 遺構

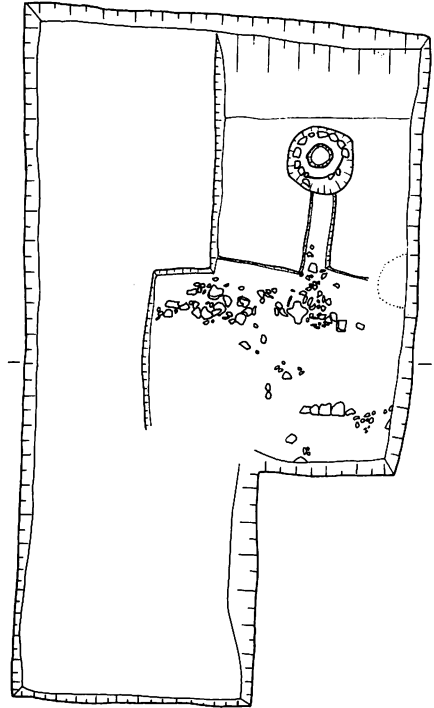
調査の結果、江戸時代の礎石建物(遍照院)・井戸・溝等が検出された。当地は、以前畑地として利用されており盛土はほとんど認められなかった。層位は、現代盛土下に耕作土・黄灰色粘土層が検出され、更にその下に茶褐色泥土層・青灰色粘土層が認められた。遺構は茶褐色泥土層・青灰色粘土層上面より検出された。以下新しいものから述べる。耕土下すぐに検出された礎石建物は、江戸時代末の遍照院西側部分にあたる。しかし、耕作中に礎石がかなり抜き取られており建物全体の規模・間取り等は明らかにできなかった。礎石は、自然石を用いており、大きさは約30cm前後であった。その中に、礎石上面に図版三-2のように柱あたりの痕跡をとどめているものがあった。観察の結果、柱は角柱で一辺が約15cm前後であったと推定される。礎石建物東側に漆喰の土間状遺構及び石敷遺構・井戸が検出された。石敷遺構は南北2.5m・東西80cmを計り拳大の礫及び瓦片を丁寧に敷きつめ漆喰面より5～10cm前後高くなっている。同一面から検出された井戸は直径約80cm前後で、井戸の内側周囲を瓦質の方形板でかたちづくっている。次に、江戸時代～慶長年間にかけての溝・井戸が検出された。溝は幅30cmで東西方向に伸び板をあてて護岸としている。井戸は、直径80cm前後で円形の掘形をもつ。構造は、上部を河原石で石組し、下部は木桶をすえている。慶長の整地層下には、青灰色粘土層が認められた。この青灰色粘土は北から南へ徐々に下がる落ち込み内に堆積していた。落ち込み底部より土器が若干出土した。

III. 遺物

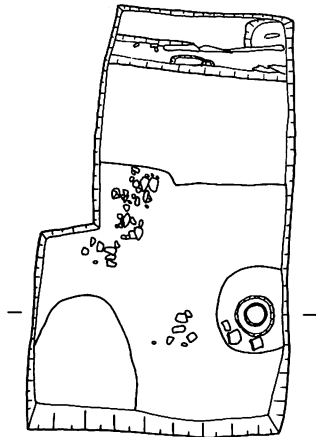
出土遺物には、土師器・瓦器・木製品等がある。しかし、その出土量は極めて少なく更に遺存状況も良好でなかった。時期は平安時代から鎌倉時代にかけてのものと考えられる。



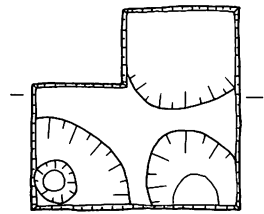
第1期遺構面



第2期遺構面



第3期遺構面



第4期遺構面



図4 第50次調査図

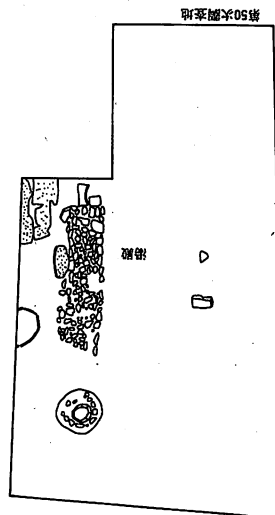
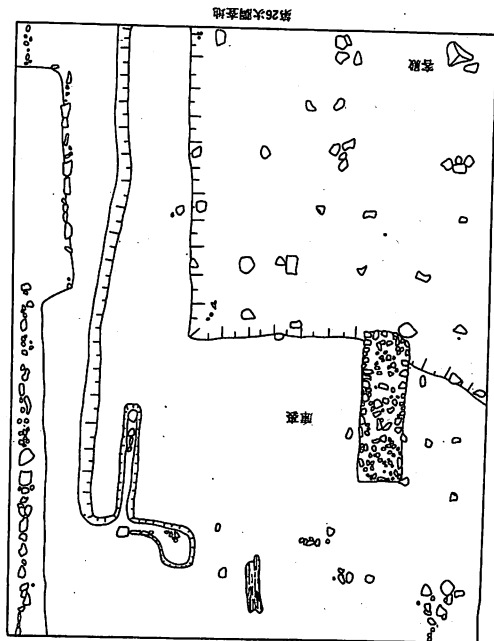
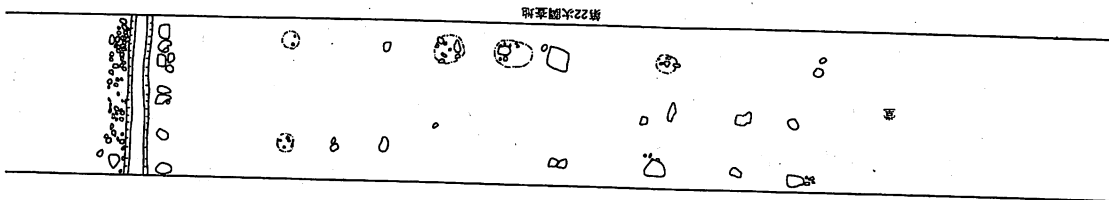
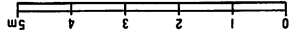
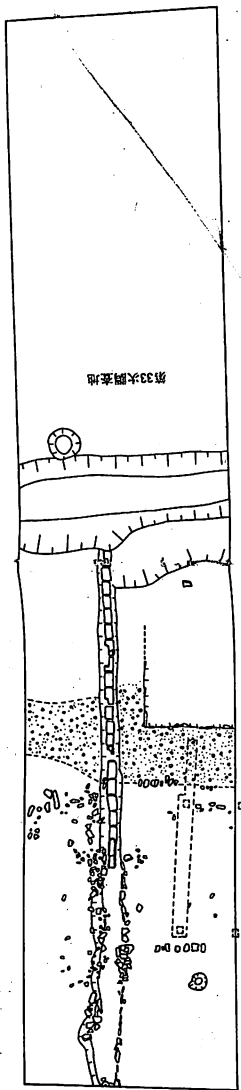


图5 遍照院跡調査図

IV. まとめ

今回の調査はきわめて小範囲のものであったが、第26・33次調査成果を総合した結果、江戸時代の安楽寿院12ヵ院の遍照院の実態がかなり具体的に明らかとなった。また鎌倉時代以降から慶長年間までの状況も徐々に明らかにする事ができた。鳥羽離宮造営時に関係する遺構は検出されなかったが、離宮の変遷史を考える上で貴重な資料を得る事ができた。

第52次（東殿 XXXII）発掘調査

I. 調査の経過

今回の調査は、水田の埋立て地に建築計画が進められたために実施した事前発掘調査である。水田の埋立は数年前に行なわれ、調査開始前は夏草の盛い茂る荒地であった。

II. 遺構

調査の結果、鳥羽離宮関係の遺構は検出されなかったが同時期の遺物包含層が良好な状況で認められた。層位は、盛土下すぐに水田耕作土が認められその下に黄灰色の床土が検出された。更に、茶褐色粘質土・茶褐色の有機物層が堆積し地山の青灰色砂礫層となる。ただ、青灰色砂礫層上面からは弥生式土器が数点出土している。遺物包含層は、床土下の茶褐色粘質土及び茶褐色有機物層である。包含層は地山の下がりにつれて西から東にかけて厚くなる。最も低い部分に茶褐色有機物層が認められた。これらの堆積土は短期間に形成されたものではなくかなり長期間にわたって徐々に流れ堆積したものと考えられる。

III. 遺物

出土遺物は主に、茶褐色有機物層から認められ土器・瓦・木製品等がある。中でも瓦は最も少なく数点しか出土しなかった。土器は、土師器・瓦器・陶磁器でほとんど磨滅していなかった。これらは平安時代末から鎌倉時代と考えられる。木製品として、箸・曲物・性格不明の木器が多数良好な状況で出土した。弥生式土器は甕・壺片で中期と考えられる。しかし、表面・断面等はかなり磨滅しており流れ堆積したものであろう。

IV. まとめ

第29次調査地と当調査地とは約80mしかへだたっていないのに対し層位・土質ともに全く異なった状況を示した。すなわち、第29次調査では、平安時代から江戸時代末にかけての各時代の遺構が海拔15m付近より検出されたのに対し、今回の調査で確認された包含層は13m代と低い状況を示した。また、堆積土やその堆積状況も異質なものであった。これらの事から調査地付近は鳥羽離宮造営以前より低湿地であったと考えられる。先年来、東殿北方部、現在の竹田桶井町の水田地はあまり調査が実施されておらず、このため鳥羽離宮造営時に当調査地近辺がどのような状況下であったかについてはほとんど明らかでなかった。今回の調査では離宮関係の遺構は検出されなかったが鳥羽離宮東殿北方部の地形復原には欠く事のできない貴重な資料を得る事ができた。

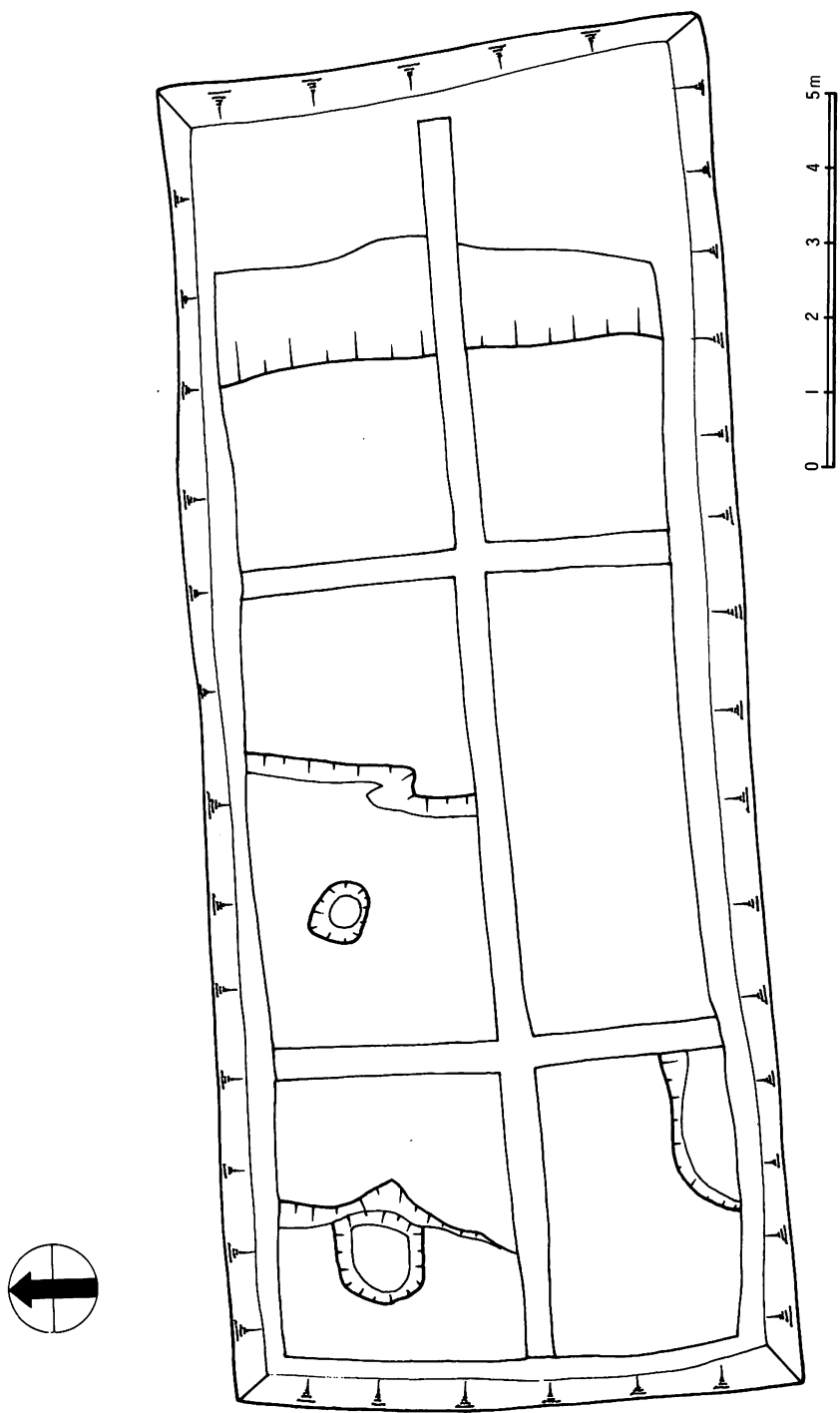


图6 第52次調査図

第53次（東殿 XXXIII ）発掘調査

I. 調査の経過

今回の調査は、先述したような現状変更に伴って実施した発掘ではなく地主の御好意を得て行なった発掘調査である。先年、当調査地区周辺は第19・26・47・50次調査が実施され、江戸時代の寺院跡や中世の掘立柱建物・鳥羽離宮期の遺構が確認されている。しかしながら、いずれの発掘調査も対象面積が極めて狭く、そのため検出された遺構も面的なひろがりの中での性格づけが不十分な状況下にあった。当調査は、先の問題点を充分考慮して開始した。

II. 遺 構

調査の結果、江戸時代の寺院跡・中世の掘立柱建物・井戸・濠や鳥羽離宮期の低地状の落ち込み等の遺構が検出された。当地は、調査開始直前まで蔬菜畑として利用されていた畑地である。基本層位は、耕作土下に茶褐色砂泥層・黄褐色泥砂層が認められた。更にその下層は暗茶褐色泥砂層・褐色砂礫層が検出された。この褐色砂礫層は地山と考えられる。以下、検出された遺構を各時期ごとにその性格特徴を述べることとする。

まず、耕作土中及びその直下より江戸時代の礎石建物が検出された。この建物跡は、現在の安楽寿院（旧前松院）に伝わる古絵図より安楽寿院

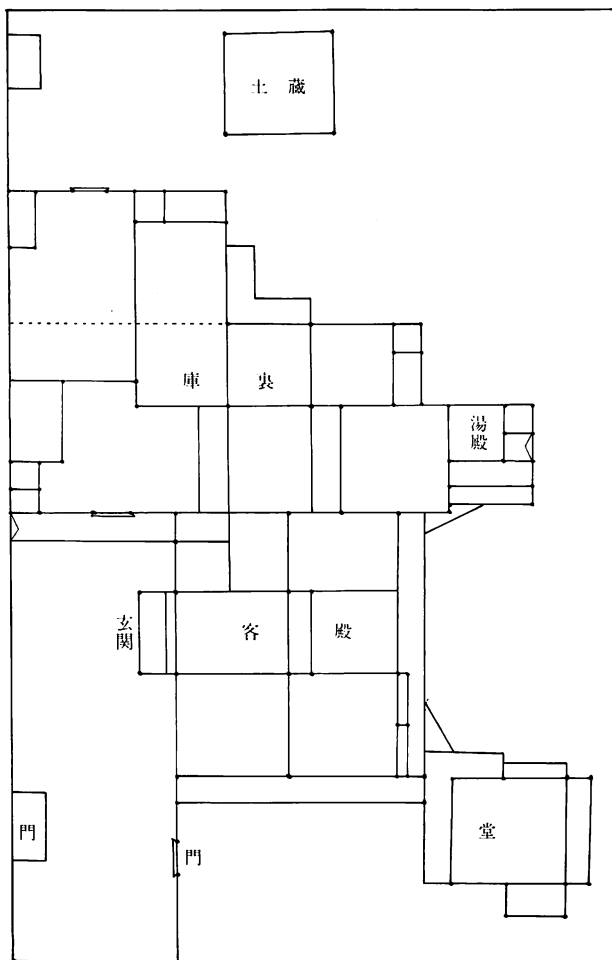


図7 明照院古図

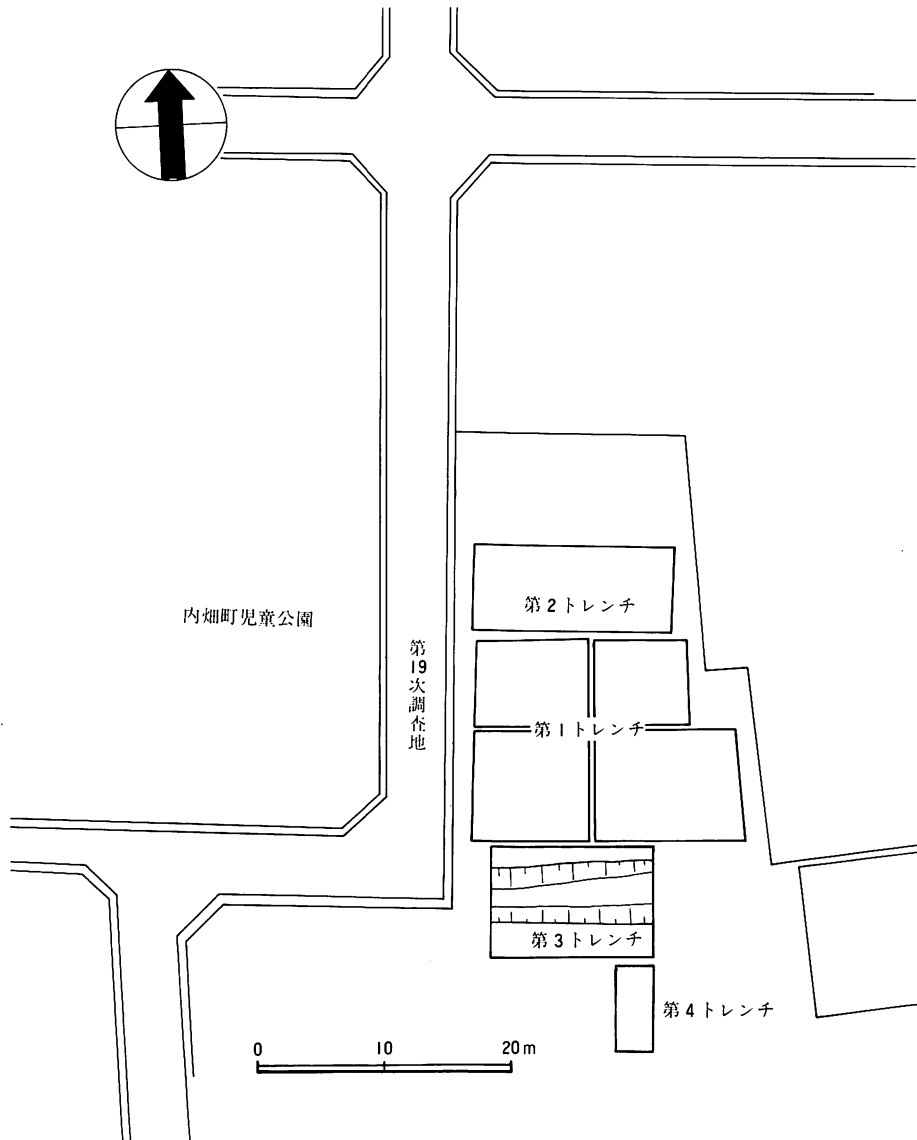


図8 第53次調査位置図

12ヶ院中の明照院である事が明らかとなった。これら12ヶ院の建物は慶長年間に建てられたものである。掘り下げの結果、この建物は創建から江戸時代末までに至る間、最低4回以上建て直しされている事が確認された。今回の調査で検出された部分を江戸時代末に書かれた明照院の間取り図と照合した結果、庫裏・御堂・湯屋等であることが明らかとなった。他にも、古絵図には記載されていなかった暗渠や溝が検出された。特に注目されたの

は、2面以上の焼亡面が認められた事である。この事は、とりもなおさず同院が創建から江戸時代末までの間に2回以上焼失した事をものがたるのである。

次に、慶長年間に行なわれた整地層直下に図版七-1にしめすような鉢を逆にふせて埋めこんだ遺構が2ヶ所検出された。これらは、鉢よりやや大きめの掘形をもっており、2ヶ所とも同一面より検出された。鉢の内部からは、底部の破片が出土しただけで他にはこの遺構を性格づけるような遺物は1点も出土しなかった。この内、1個体には体部下半に焼成後に開けられた小穴が認められた。この鉢の底部外面には脚が付いていた痕跡が3ヶ所に認められた。また、同一面より図版六-2のように方形の掘形内に平瓦を隙間なく敷きつめたものが検出された。瓦はすべて凸面を上にし、面をきちんとそろえていた。これらの瓦の上には黄褐色砂がおおっていた。中世の遺構には、掘立柱建物・井戸・濠がある。建物の柱穴は20~30cm前後で、柱痕の遺存していたものもある。建物の規模及び性格については、今回の調査では明らかにする事ができなかった。井戸は、上部を石組みしその下に桶を設けている型式のものと同曲物だけの構造のものがあった。調査地の南側で、幅6m、深さ1.5mを計る東西方向の濠を検出した。濠は、素掘りでなんらの護岸施設も認められなかった。この濠は、第35次調査で検出されたS D-11と規模・方向とも類似しており同一の遺構もしくは、同時代の関連遺構と考えられる。一部ではあるが第26・33次調査の時にも検出されている。鳥羽離宮期から鎌倉時代にかけての遺構は、先の濠の北側で検出された低湿地状の落ち込みがある。この落ち込みは濠によって切られている。落ち込みの北側肩口には鳥羽離宮所用瓦が多量に投げ込まれていた。瓦は、一括投げ捨てされたような状況で出土した。この落ち込みは東側が最も深くその底部には木枝・木葉・竹根・水草等の有機物を多量に含む腐植土層が埋積していた。同層より多量の土器・瓦・木製品が出土した。

III. 遺物

遺物は主に低湿地状の落ち込みやその肩口・濠より出土した。特に、この落ち込み内の遺物はその出土状況から見て、一時期に一括投げ捨てられた可能性が強い。それらは、土師器・瓦器・箸等の日常雑器類と鳥形・舟形木製品・墨書板等の呪術に関係したと考えられるものにと大別される。以下、従来発見例の少ないこの様な木製品について述べることにする。鳥形木製品・舟形木製品・墨書板ともほぼ同一層でしかも隣接して出土した。鳥形木製品は、厚さ6mm前後の板目材をもちいて嘴・頭部・胴部・尾部を削り出して形づくっている。両面及び周囲は、刃子状の工具で丁寧に仕上げている。外面には墨書及び彩色

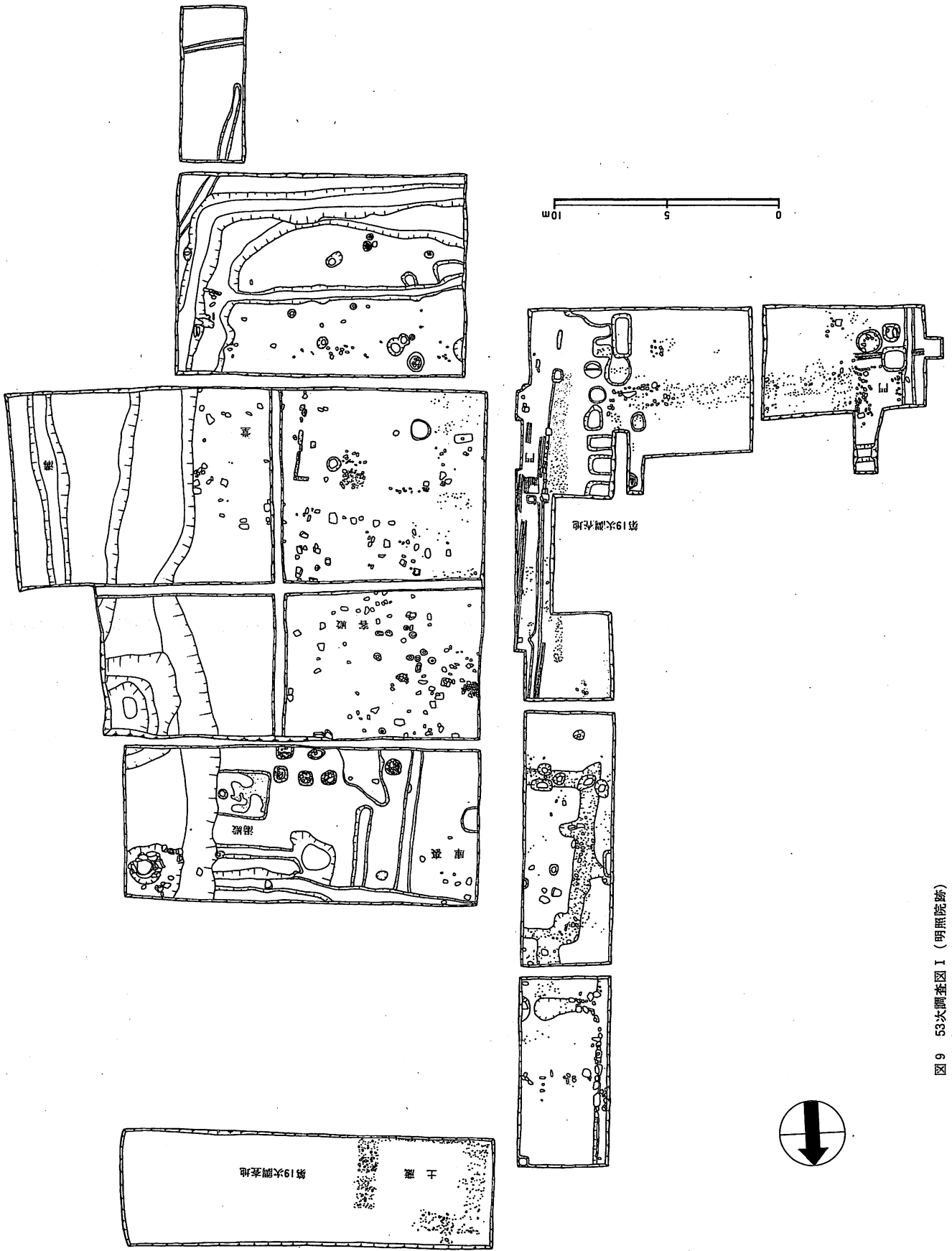


图9 53次調查圖I (明照院跡)

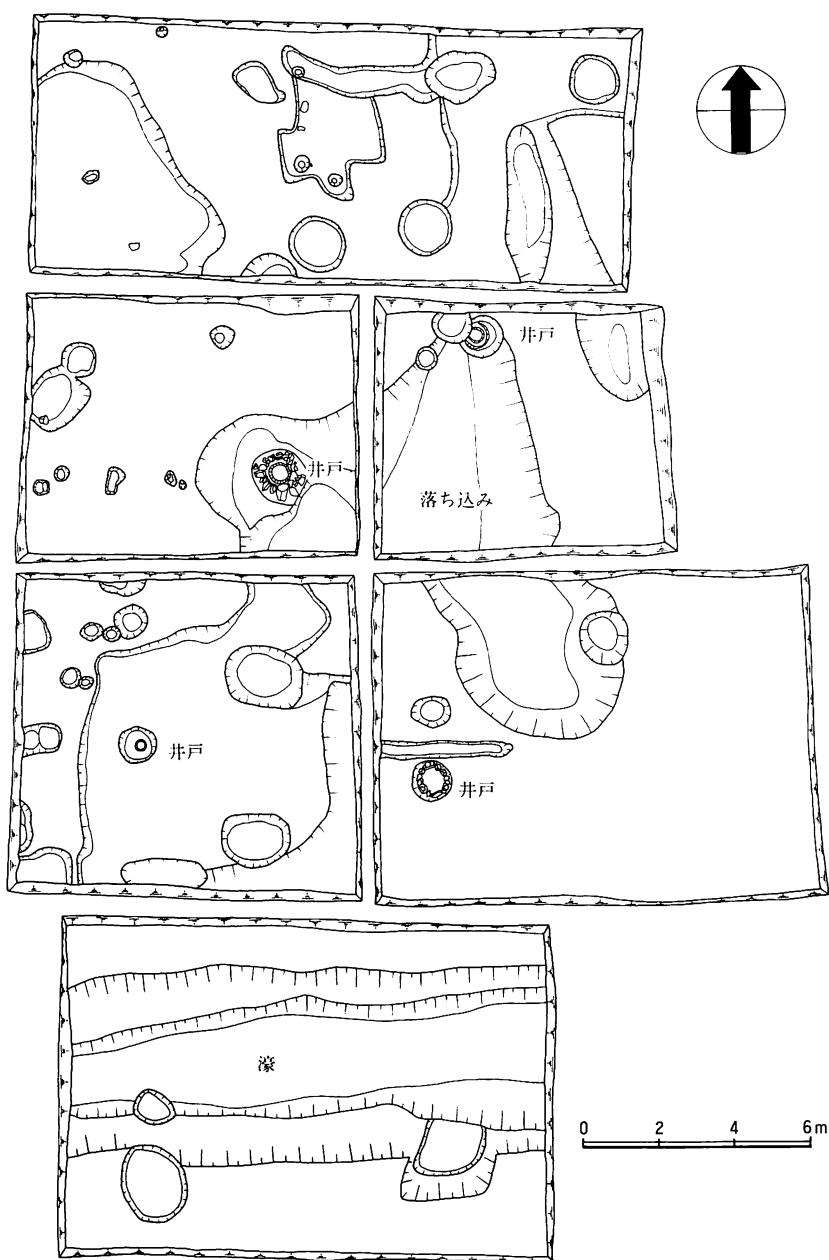


図10 第53次調査図Ⅱ（平安末～鎌倉時代）

は全く認められなかった。舟形木製品は2点出土した。1点は完形品で、もう片方は一部欠落している。それぞれ大きさ、構造が若干異なる。基本的には、舟底外面は丸く仕上げる。内部はノミ状工具で刳込で仕上げる。双方とも一見丸木舟風である。墨書板は一辺が2 cm前後の角材に墨書されている。墨書は四面に認められる。一部墨書された文字がノコギリ状のもので切られている事から本来この角材はもっと長いものであったと考えられる。文字の解読及びその内容については現在検討中である。

IV. まとめ

検出された礎石建物が慶長年間から江戸時代末にいたる間に2回以上にわたって焼亡した事は先に述べたが、これに類似した例が第15次調査の際発見された玉蔵院にも認められた。この玉蔵院も明照院と同じく安楽寿院12ヶ院を構成する院である。これらの焼亡時期が同時であったのか、時期を異にするかどうかについては今後の課題としたい。

また、検出された礎石建物の全体の配置・柱間等を整理した結果、先の古絵図がかなり精度の高い資料である事が明らかとなった。調査区南側で検出された濠は平安時代以後に設けられ慶長年間にいたるまで利用されていた事が出土遺物ならびに層位関係より明らかとなった。このような遺構は第35・21・31・54・55次の各調査で発見されている。しかしながら、相互関係を具体的に知るまでは至っていない。

鳥羽離宮関係の明確な遺構は今回の調査では検出する事ができなかったが同時代の瓦が落ち込み等より多数検出された。出土状況や遺物の状況から見て調査区近辺に同時代の遺構が遺存している事が充分考えられ、今後の調査の進展に期待したい。

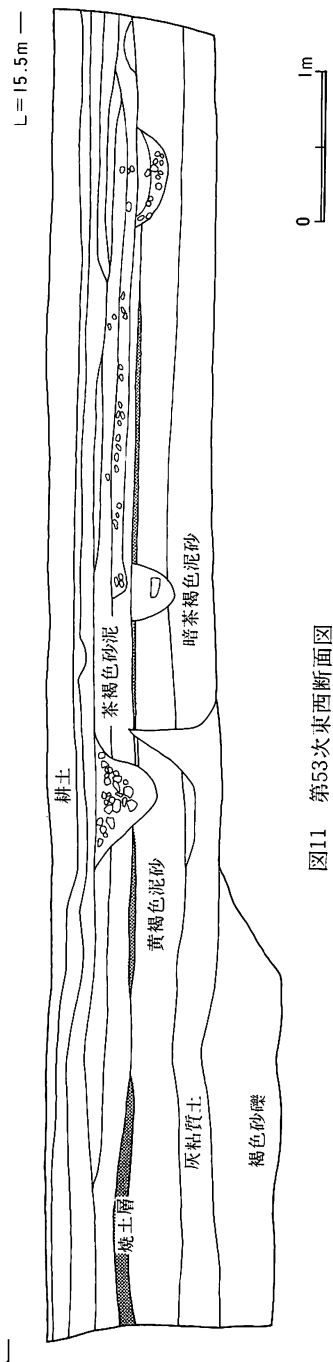


図11 第53次東西断面図

第56次（東殿 XXXVI）発掘調査

I. 調査の経過

調査地は、東殿推定地の西南の地域に当り、白河天皇陵の北方に位置する。附近の調査は、第24次調査地A区が昭和51年度に実施されているが、この調査では何ら遺構らしきものは確認されず、茶褐色泥土層がみられたことから池跡でないことのみは判断できた。当地は畑地として利用されていた区域で、調査地の南を東西に流れる溝を境として、北が一段高く南が低く水田に変化する地形となる。

調査は、今年度区画整理道路部の調査（第55次発掘調査）と併行して行うこととし、道路調査地の北辺に沿って、南北3m東西12mの調査地を設定した。

II. 遺構

調査の結果、調査地の北部が茶褐色泥土、南半分が灰色粘土が分布することがわかり、この境で1箇所は庭石3個、もう1箇所は1個の花崗岩を出土した。したがって調査地は陸部から池部に移る個所に当り鳥羽離宮時代の庭園遺構と判断した。

層位は耕土・床土下に淡茶褐色泥土がみられ、これを除去すると北半分は茶褐色泥土、南半分は池の堆積があらわれ、庭石も検出された。池内堆積は、灰色～青灰色粘土層が厚く堆積し、大きく分けて2層となり、下部は腐植土に近い状態でみられた。

陸部の状況は、表土下40cmで茶褐色泥土があらわれ、これに多くの小礫を含んでいる。北が高く徐々に南に傾斜し、調査区の東西中央部で一段下がり池部に移る。この一段下が

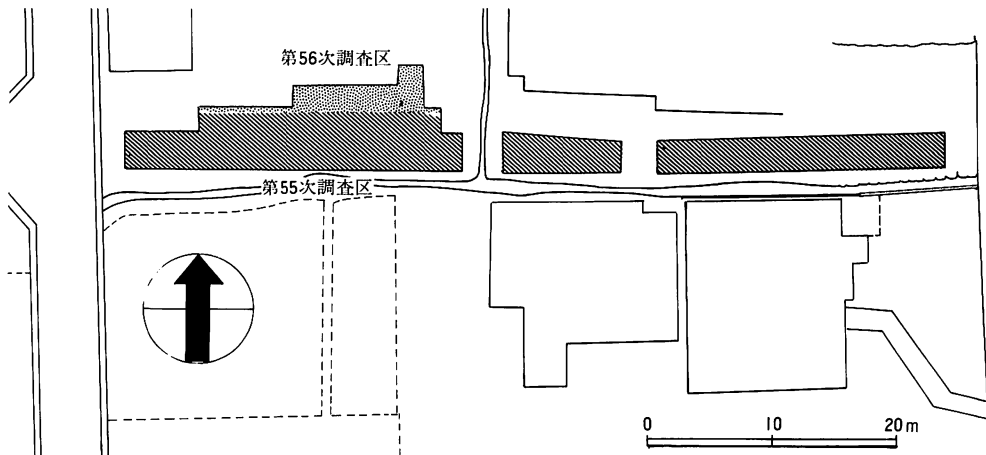


図12 第56次調査位置図

る部分に庭石を計4個据えている。

池部の状況は、陸部面より30~70cm下がり、調査区内ではほぼ全面に礫を敷きつめ一部瓦の混入がみられた。陸部と池部との境からわずかに池部に下がった部分で東西に走る一段の下がりが見られこれを礫によって固める状況がみられた。おそらく池の水の浸食に対する護岸であろう。したがってこの部分の状況は2段に段を形成し陸部が池底部に移行しており作庭の技法と思われる。底部の状況は、ベースの砂礫層上に灰色粘土と礫を混ぜて造りこの礫が上面で敷きつめられた状態で検出されたものと考えられる。

庭石4個は、調査区のほぼ中央で3個が集中して置かれ、西部で1個が据えられていた。中央3個はほぼ同じような大きさのもので長さ約1mを測る。西部の1個は、平らな面をやや南に傾斜させて据えられていた。



図13 第56次調査図

Ⅲ. 遺物

出土した遺物は整理箱で5箱分で、瓦片が最も多く、陶磁器類・土師器片とも出土している。池内からは、木片等が出土したが木製品として明確なものはなかった。

Ⅳ. まとめ

今回の調査地は白河天皇陵の北方に位置し汀線といったような池の遺構を推定していなかった位置に当り、検出した池跡は天皇陵の北方に入り組んだ形で造られたものと判断した。したがって東殿の汀線は予想以上に複雑に入り組んだものと思われ今後の調査に充分注意していきたい。今回の検出例で東殿地区では5個所の庭園遺構を確認したことになる。

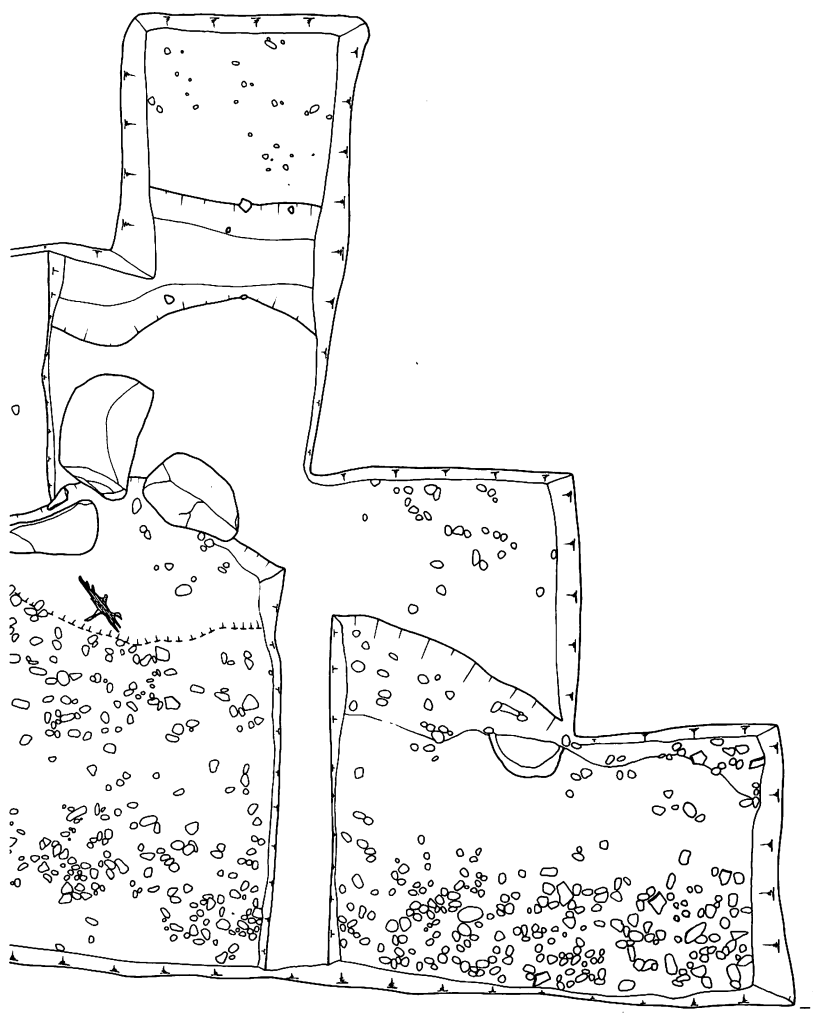
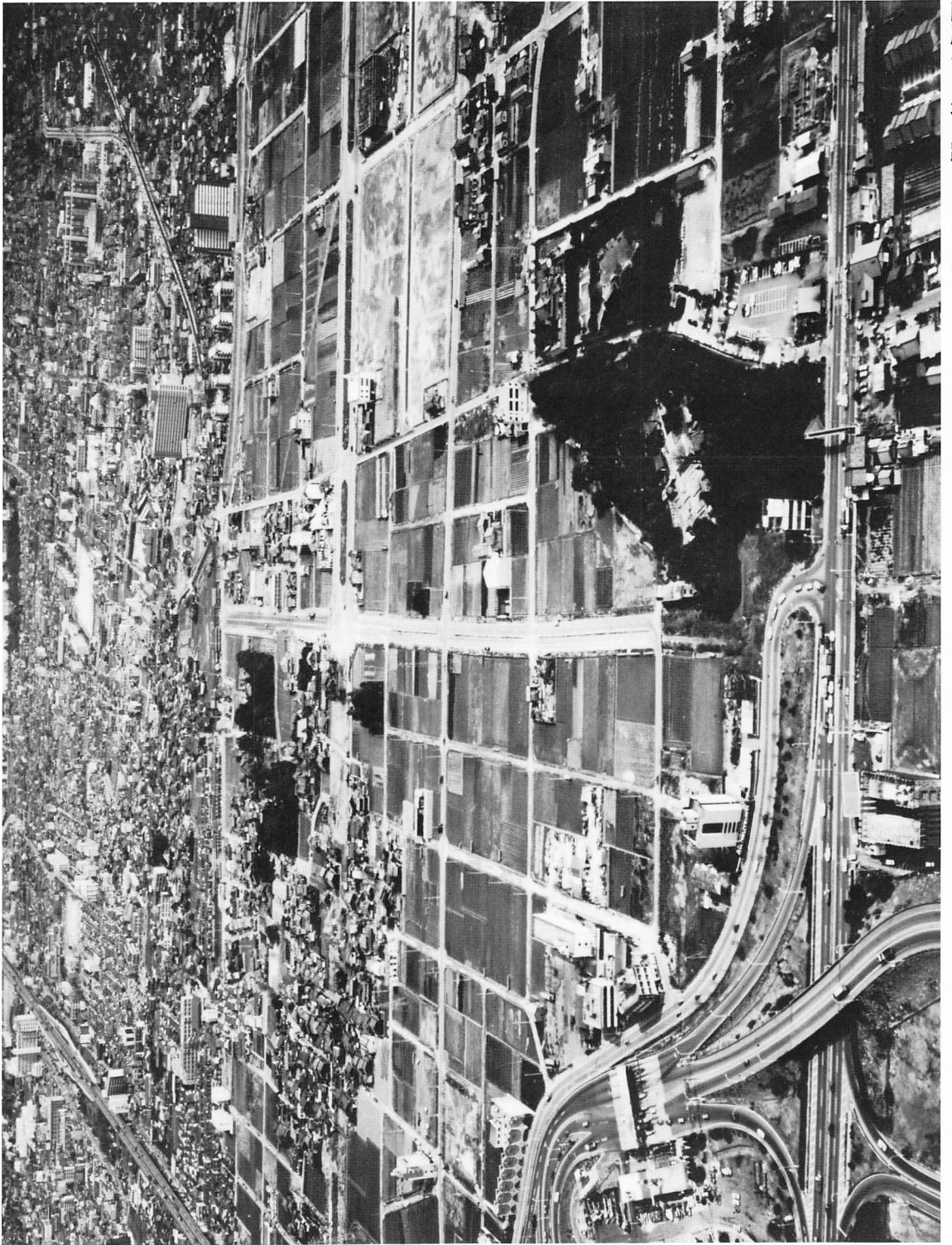


圖 版



鳥羽離宮跡遠景 (西より)



1 第49次調査地西半（東より）



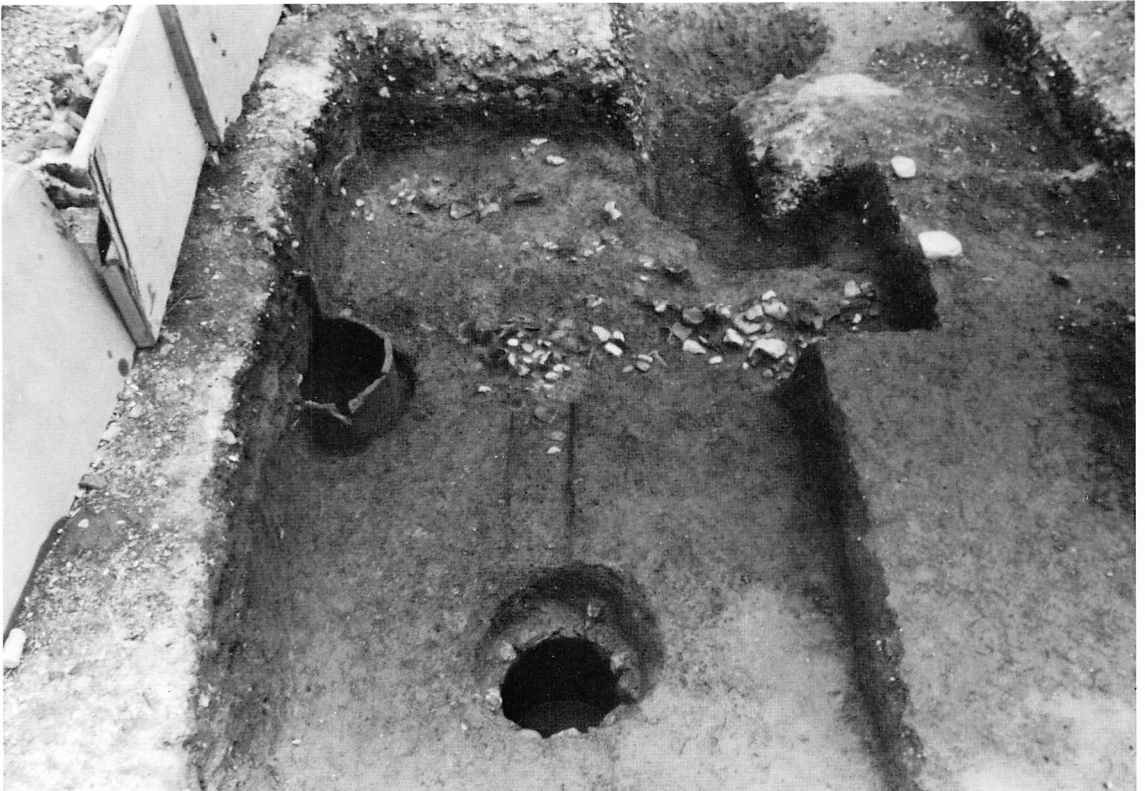
2 第49次調査地東半（西より）



1 第50次調査地 江戸時代（北より）



2 第50次調査地 礎石



3 第50次調査地 中世（北より）



第52次調査地全景（西より）



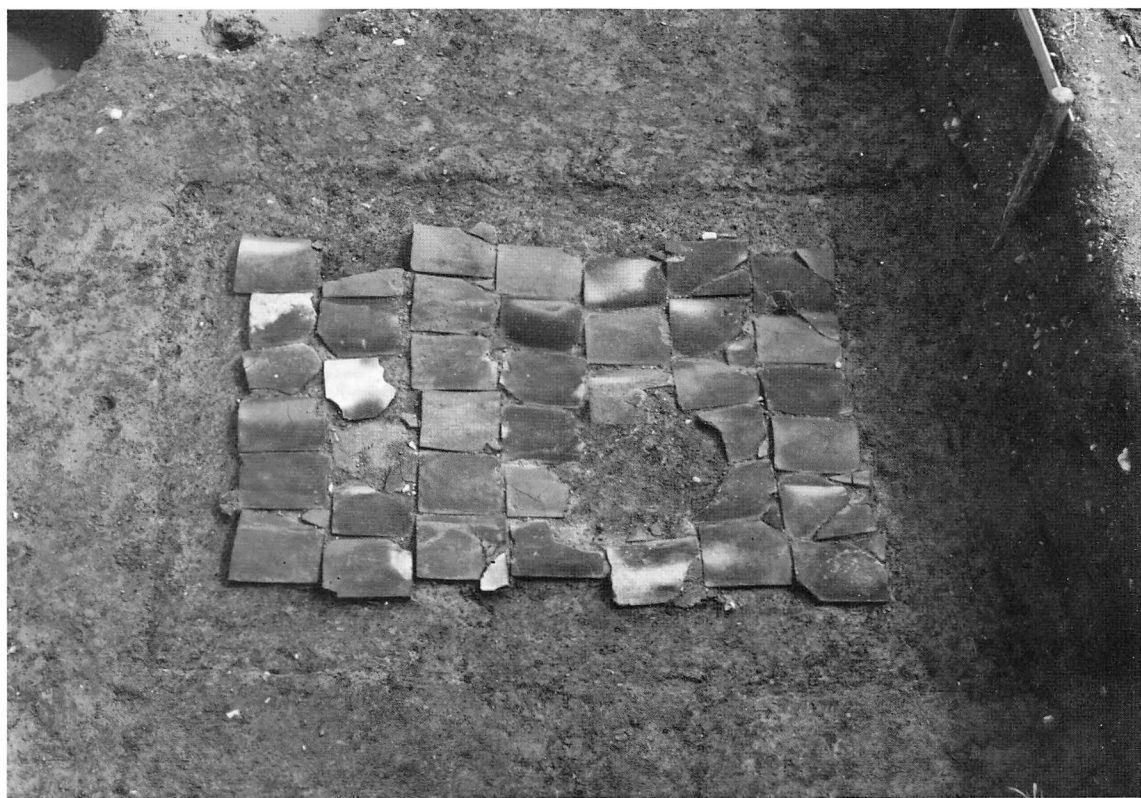
1 第53次調査地明照院跡（第1トレンチ・南より）



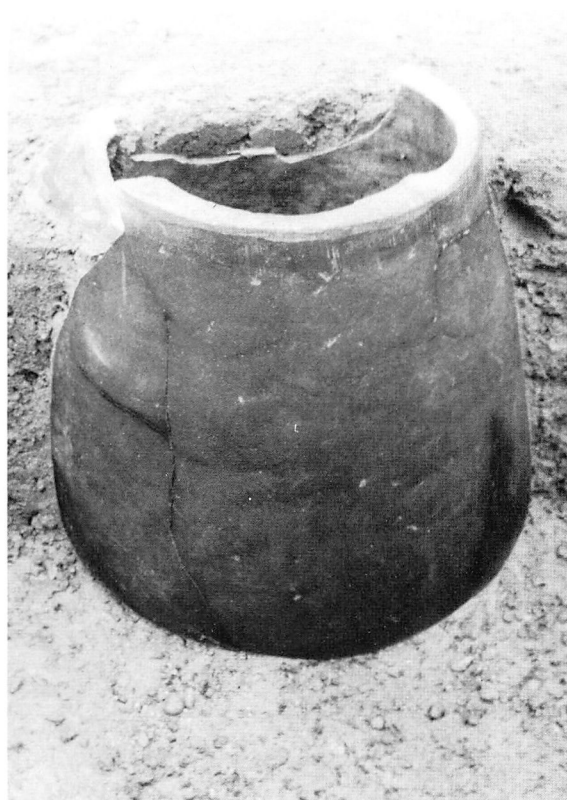
2 第53次調査地明照院跡（第2トレンチ・西より）



1 第53次調査地 明照院跡（第1トレンチ・南より）



2 同上 瓦敷細部（西より）



1 第53次調査地 特殊遺構（南より）



2 同 特殊遺構（南より）



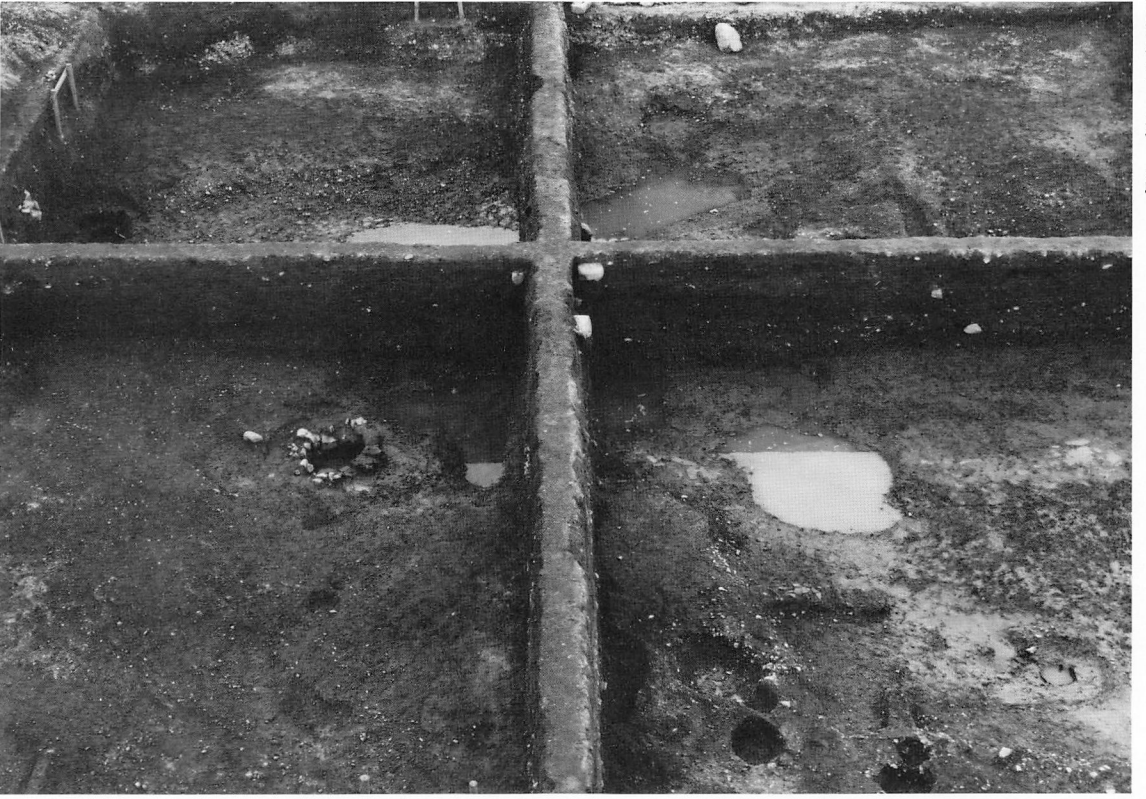
3 同 江戸時代（南東より）



1 第53次調査地中世（北西より）



2 第53次調査地柱痕（南より）



1 第53次調査地 最終遺構面（第1トレンチ・西より）



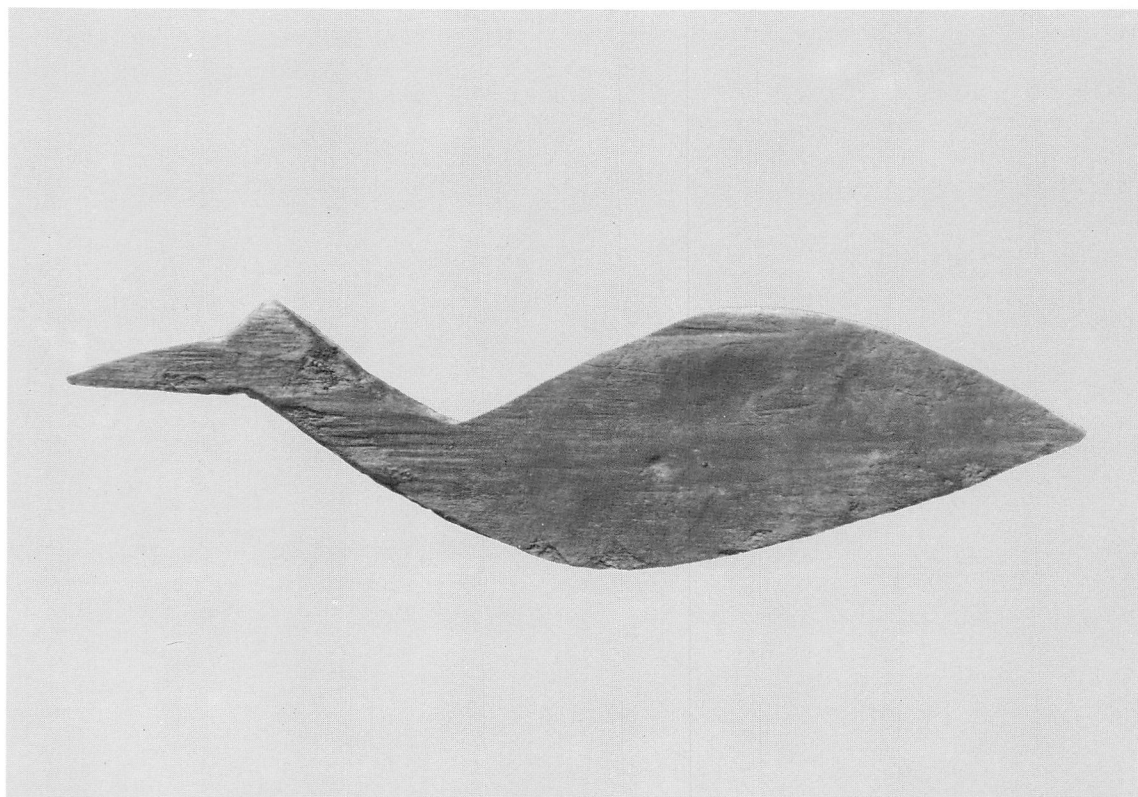
2 同上 断面写真（第1トレンチ・東西断面）



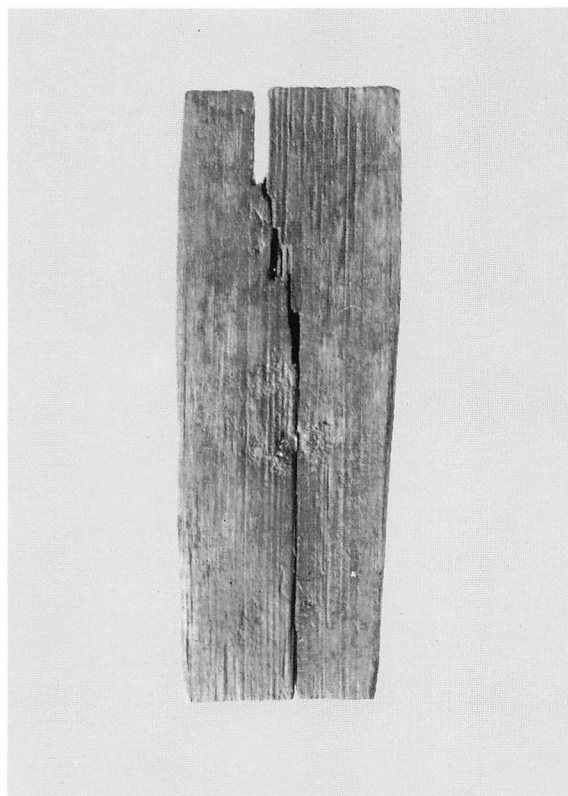
1 第53次調査地濠第3トレンチ（西より）



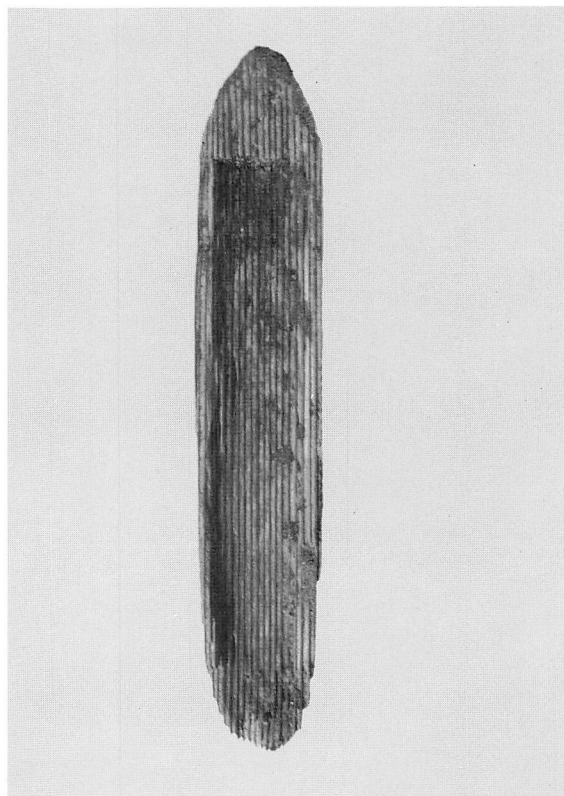
2 同上 西壁断面



1 第53次調査地 鳥形木製品



2 第53次調査地 墨書板



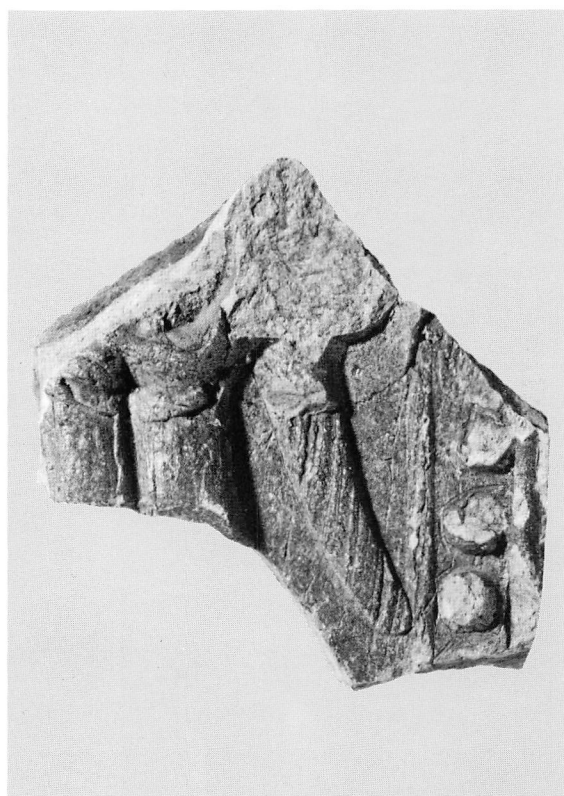
3 第53次調査地 舟形木製品



1 第53次調査地 鬼瓦（江戸時代）



2 同（平安時代末期）



3 同（平安時代末期）



第56次調査地全景（西より）

鳥羽離宮跡（1979年度）
文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要

発行日 1980年3月31日

調査主体 京都市文化観光局

発行編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
TEL (075)415-0521

印刷 真陽社